



**ADVANTEST**<sup>®</sup>

# 2018年度（2019年3月期） 決算説明会

2019年4月25日  
株式会社アドバンテスト

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

# ご注意

---

## 会計基準について

- 本プレゼンテーション資料に記載されている実績や見通し数値は、国際会計基準（IFRS）に基づいて作成しています。

## 将来の見通しに関する記述について

- 本プレゼンテーション資料およびアドバンテスト代表者が口頭にて提供する情報には、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれていません。
- これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務状況や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって明示されているもの又は暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されています。

## 本資料の利用について

- 本プレゼンテーション資料に記載されている情報は、各国の著作権法、特許法、商標法、意匠法等の知的財産権法その他の法律及び各種条約で保護されています。事前に当社の文書による承諾を得ない限り、法律によって明示的に認められる範囲を超えて、これらの情報を使用（改変、複製、転用等）することを禁止します。



```
...mirror_object = ...
operation == "MIRROR_X":
    mirror_mod.use_x = True
    mirror_mod.use_y = False
    mirror_mod.use_z = False
operation == "MIRROR_Y":
    mirror_mod.use_x = False
    mirror_mod.use_y = True
    mirror_mod.use_z = False
operation == "MIRROR_Z":
    mirror_mod.use_x = False
    mirror_mod.use_y = False
    mirror_mod.use_z = True

@selection at the end -add ...
obj.select= 1
mirror_ob.select=1
context.scene.objects.active
obj["Selected"] + str(modifier_ob)
mirror_ob.select=1
```

## 2018年度決算報告

常務執行役員 藤田 敦司

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

**ADVANTEST**<sup>®</sup>

## FY18業績ハイライト

- 半導体の高性能化や信頼性保証強化需要の高まりに呼応し、旺盛なテスト需要が通期持続
- 半導体在庫調整など、事業環境が下期悪化したものの、過去最高の受注高を記録
- 高水準な需要に追従すべく生産・サポート体制の強化に努め、過去最高の売上高を達成
- 業務効率の改善などにも努めた結果、当期利益、ROE、年間配当金も過去最高

### ○ 2018年度の業績について

- FY18業績の総括ですが、半導体の高性能化や信頼性保証強化需要の高まりに呼応し、旺盛なテスト需要が通期持続しました。
- その動きに支えられ、半導体在庫調整など、事業環境が下期は悪化したものの、過去最高の受注高を記録できました。
- 高水準な需要に追従すべく生産・サポート体制の強化に努めたことで、過去最高の売上高を達成しました。
- 業務効率の改善などにも努めた結果、当期利益、ROE、年間配当金も過去最高となりました。

## FY18業績概要

(億円)

	FY17 実績	1月時点 予想	FY18		
			実績	前年同期比	
				増減額	増減率
受注高	2,478	2,650	2,752	+274	+11.1%
売上高	2,072	2,780	2,825	+752	+36.3%
営業利益	245	630	647	+402	+2.6倍
営業利益率	11.8%	22.7%	22.9%	+11.1pts	
税引前利益	243	640	662	+419	+2.7倍
当期利益	181	545	570	+389	+3.1倍
当期利益率	8.7%	19.6%	20.2%	+11.5pts	
IFRS第15号適用に伴う 期首受注残の調整		▲30	▲30		
Astronics社SLT事業譲受に伴う 受注残の増加			+24		
受注残	828	668	749	▲79	▲9.5%
為替レート	1米ドル 1ユーロ	111円 130円	110円 129円	1円 円高 -	
1株当たり配当額 (年間)	32円	88円	92円	60円 増配	

### ○ 2018年度業績概要

- 受注高 前年度比 11.1%増 2,752億円
- 売上高 前年度比 36.3%増 2,825億円
- 営業利益 前年度比 2.6倍 647億円
- 当期利益 前年度比 3.1倍 570億円
- 4Qもスマートフォン関連のテスト需要が予想以上の水準で推移したことで、1月時点の通期予想を超過しました。
- また2月に米国Astronics社からシステムレベル・テスト (SLT) 事業を譲り受けた影響として、受注残が24億円増加しています。

## 四半期業績推移

(億円)

	FY17				FY18				前期比		前年同期比	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	増減額	増減率	増減額	増減率
	受注高	494	562	568	854	706	762	627	657	+29	+4.7%	▲198
売上高	407	477	509	679	709	727	749	640	▲110	▲14.6%	▲40	▲5.9%
売上総利益	206	249	232	379	382	389	425	344	▲81	▲19.1%	▲34	▲9.1%
売上総利益率	50.6%	52.1%	45.8%	55.7%	53.9%	53.6%	56.8%	53.8%	▲3.0pts		▲1.9pts	
営業利益	22	52	32	139	158	180	207	102	▲105	▲50.8%	▲36	▲26.3%
営業利益率	5.5%	10.9%	6.4%	20.4%	22.3%	24.7%	27.6%	15.9%	▲11.7pts		▲4.5pts	
税引前四半期利益	16	48	34	145	165	186	206	105	▲101	▲49.1%	▲40	▲27.7%
四半期利益	10	39	26	106	139	162	179	90	▲90	▲50.1%	▲17	▲15.9%
四半期利益率	2.4%	8.2%	5.0%	15.6%	19.6%	22.4%	23.9%	14.0%	▲9.9pts		▲1.6pts	
IFRS第15号適用に伴う 期首受注残の調整					▲30							
Astronics社SLT事業譲受に伴う 受注残の増加								+24				
受注残	509	594	653	828	795	830	708	749	41	+5.8%	▲79	▲9.5%
為替レート	1米ドル	112円	111円	112円	111円	108円	111円	113円	111円	2円 円高	-	
	1ユーロ	121円	128円	132円	134円	131円	129円	130円	126円	4円 円高	8円 円高	

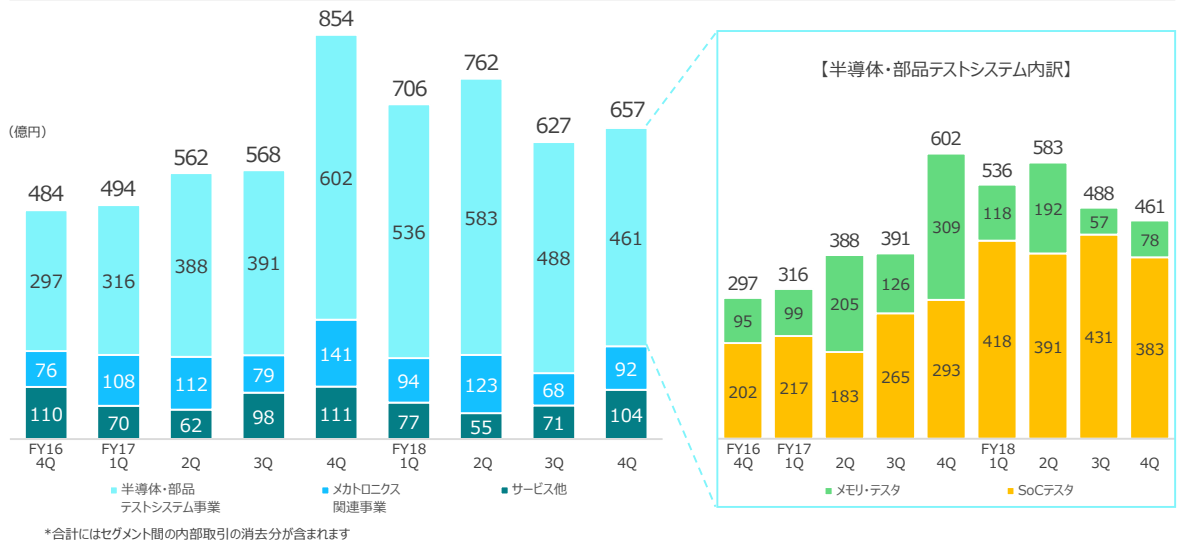
6 | ADVANTEST

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

### ○ 2018年度第4四半期の業績概要

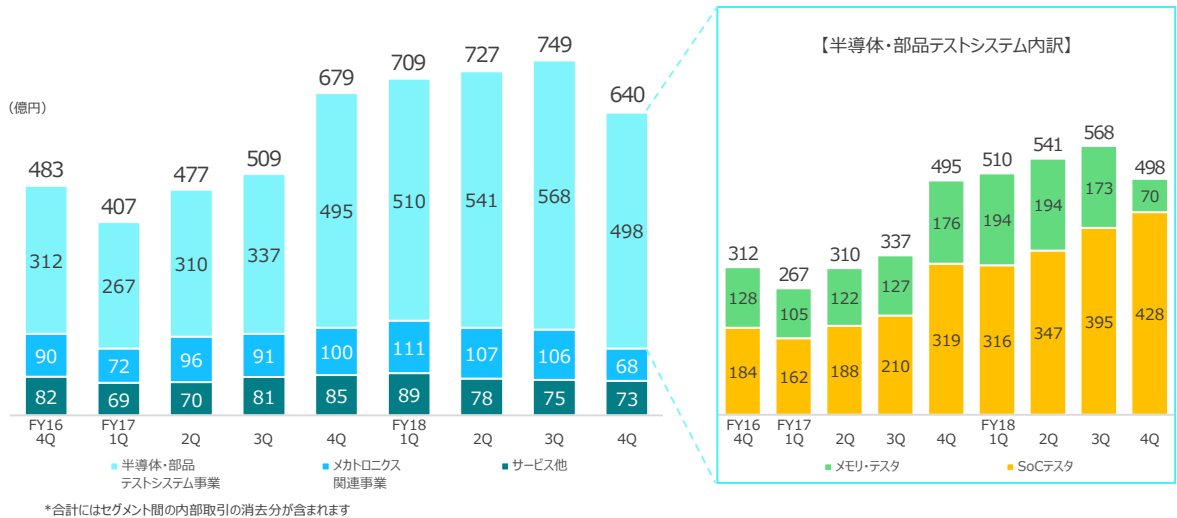
- FY18の四半期業績推移です。
- 3か月前は、4Qの受注は3Q比減少すると予想していましたが、SoCテストの好調などで、3Qを超える受注高となりました。

## 四半期受注高 事業セグメント別



- 2018年度第4四半期の事業別受注高
- 半導体・部品テストシステム事業
  - ・ 前期比 5.8%減 461億円
  - ・ SoCテストは、アプリケーション・プロセッサ、ディスプレイ・ドライバIC、イメージ・センサなどスマートフォンに使われる半導体向けに需要が集まり、383億円となりました。
  - ・ メモリ・テストは、高速DRAM向けやNANDフラッシュ向けで受注を集め、78億円となりました。前期比では21億円の増加です。
- メカトロニクス関連事業
  - ・ 前期比 37.0%増 92億円
  - ・ 先端プロセス向けでナノテクノロジー製品の受注が伸びました。
- サービス他
  - ・ 前期比 45.6%増 104億円
  - ・ 保守契約の受注が伸びました。

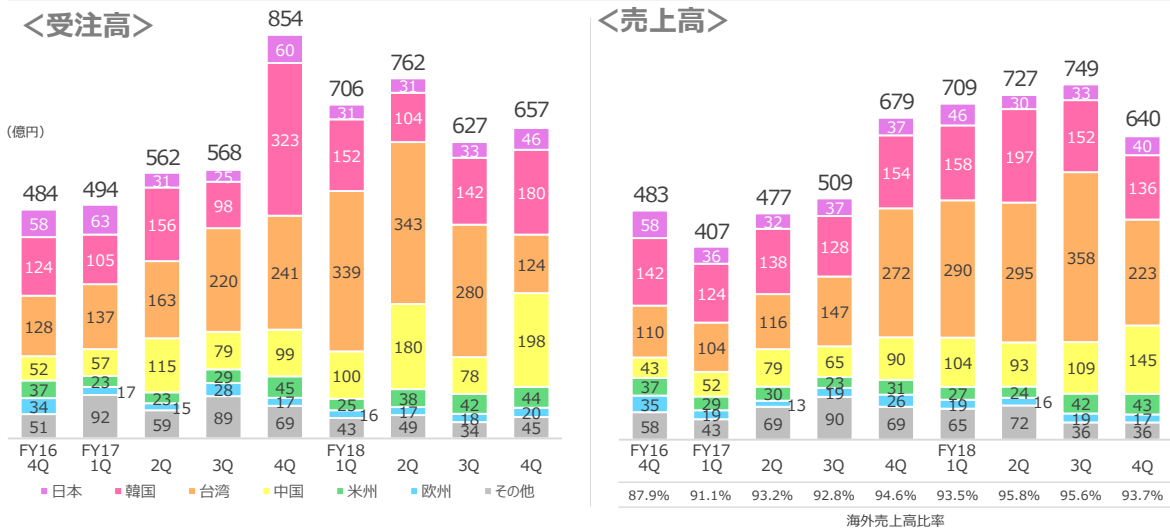
## 四半期売上高 事業セグメント別



- 2018年度第4四半期の事業別売上高
- 半導体・部品テストシステム事業
  - ・ 前期比 12.1%減 498億円
  - ・ SoCテスト売上は、四半期売上記録を再度更新する428億円となりました。
  - ・ メモリ・テストは、3Qの受注減少を受け70億円の売上にとどまりました。
- マカトロニクス関連事業
  - ・ 前期比 35.8%減 68億円
  - ・ メモリ・テストと連動し、デバイス・インタフェースの売上が減少しました。
- サービス他
  - ・ 前期並み 73億円



## 四半期受注高/売上高 地域(出荷先)別



### ○ 2018年度第4四半期の地域別受注高

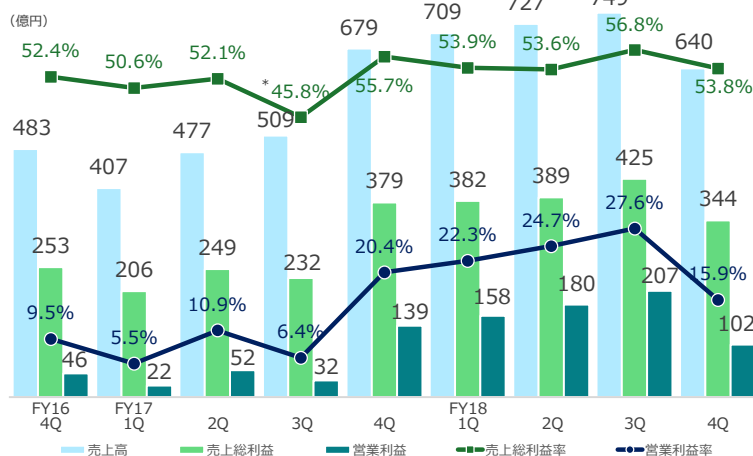
- 韓国、中国、台湾  
先端プロセスの立ち上がりや中国ローカルの半導体サプライチェーンの立ち上げといったイベントが重なり、地域ミックスに変化が見られた四半期となりました。その結果、中国や韓国の受注が伸びています。

韓国といえばメモリ半導体を想像されると思いますが、スマートフォンの高性能化を背景に、FY18通期でみるとメモリ・テストよりもSoCテストの方が大きな受注額となっています。

### ○ 2018年度第4四半期の地域別売上高

- 台湾  
メモリ向けを中心に売上が減少。

## 売上高/売上総利益/営業利益



\*FY17 3Qにナノテクノロジー事業の棚卸資産評価損(33億円)を計上しています。  
この評価損影響を除いたFY17 3Qの売上総利益率は、52.3%となります。

	(億円)	
	FY17	FY18
売上高	2,072	2,825
売上総利益	1,066	1,540
売上総利益率	51.4%	54.5%
販管費等	821	893
営業利益	245	647
営業利益率	11.8%	22.9%

### ○ 2018年度第4四半期の営業利益

- 売上総利益率 53.8%  
プロダクトミックスが3Qに比べやや悪化したこと、棚卸資産の期末評価により、3Q比低下しています。
- 販管費等 242億円  
実質的な販管費は横ばいでしたが、「販管費等」としては、3Q比24億円増加となります。  
国内グループ社員の年金制度の一部を確定拠出年金制度に移行したことによる清算益25億円を、3Qに計上した反動によるものです。
- 営業利益 102億円  
3Q比105億円減となりました。売上の減少、売上総利益率の低下、年金制度移行に伴う利益押上げがなくなったことによりです。
- 営業利益率 3Q比 11.7ポイント悪化 15.9%

### ○ 2018年度通期の営業利益

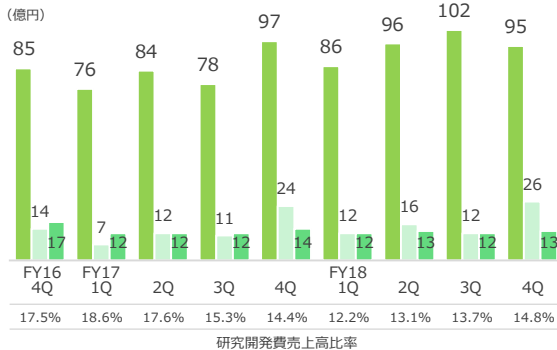
- 右表のとおり、売上高が伸びる中でも販管費の伸びを少なく留めたことで、営業利益が大幅に増加しました。
- 一時的な営業損益を控除した、いわゆるコア営業利益は609億円となりました。コア営業利益率は21.6%です。

# 投資等/キャッシュ・フロー

## <投資等>

- 研究開発費
- 設備投資
- 減価償却費

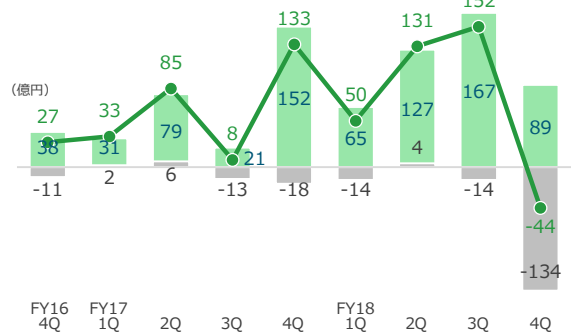
	FY17	FY18
研究開発費 売上高比率	335 16.2%	379 13.4%
設備投資	54	66
減価償却費	50	50



## <キャッシュ・フロー>

- 営業キャッシュ・フロー
- 投資キャッシュ・フロー
- フリー・キャッシュ・フロー

	FY17	FY18
営業キャッシュ・フロー	283	448
投資キャッシュ・フロー	▲23	▲159
フリー・キャッシュ・フロー	259	289



\*フリー・キャッシュ・フロー = 営業キャッシュ・フロー + 投資キャッシュ・フロー

○ 2018年度第4四半期の研究開発費等

- 研究開発費 95億円
- 研究開発費売上高比率 14.8%
- 設備投資 26億円
- 減価償却費 13億円

○ 2018年度通期の研究開発費等

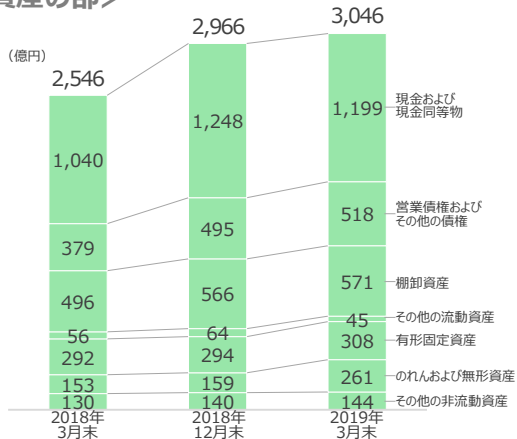
- 全体的に計画通りの進捗となりました。

○ キャッシュ・フローの状況

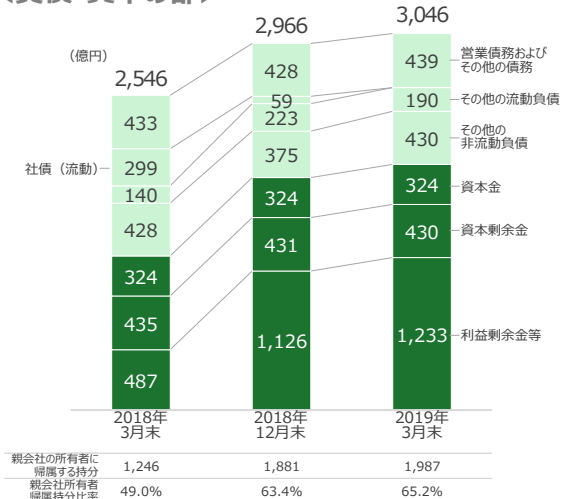
- Astronics社のSLT事業譲受により、4Qは投資キャッシュフロー支出が大きくなり、フリー・キャッシュ・フローがマイナスとなりました。

# 連結財政状態

## <資産の部>



## <負債・資本の部>



### ○ 2019年3月末時点のバランス・シート

- ・ 総資産 3,046億円
- ・ 現金および現金同等物 前年度末比160億円増 1,199億円
- ・ のれんおよび無形資産 前年度末比108億円増 261億円  
Astronics社のSLT事業を2月に譲り受けたことでの増加です。  
ただし現在は取得原価の配分作業中のため、暫定額となります。  
配分作業は6月末に完了する見通しです。
- ・ 社債（流動）  
2019年2月転換期限の転換社債は全額、転換されました。
- ・ 親会社の所有者に帰属する持分 1,987億円
- ・ 親会社所有者帰属持分比率 前年度末比16.2ポイント増 65.2%



## 2019年度事業見通しと中期経営計画の進捗

代表取締役 兼 執行役員社長 吉田 芳明

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

**ADVANTEST**<sup>®</sup>

## テスト市場予想 <19年4月時点の見方>

### CY18実績

- 半導体の性能・信頼性高度化を背景に、多くの半導体メーカーが活発なテスト投資を通年維持
- 販売動向を精査し、CY18市場規模を1月時点の推定値から増額修正

### CY19予想

- 世界経済の不透明感が濃い中、テスト市場も減速局面入り。環境改善時期はFY19下期を見込む
- 次期先端半導体のテスト能力増強投資に牽引され、CY20のテスト市場規模は再び拡大へ

	CY18実績	CY19推定	変化率
SoCテスト市場	約\$2,550M (1月推定値:約\$2.4B)	約\$2,000M (1月推定値から変更なし)	前年比 約20%減
メモリ・テスト市場	約\$1,150M (1月推定値:約\$1.0B)	約\$550-650M (1月推定値:約\$700-800M)	前年比 約40-50%減

### ○ 暦年2019年のテスト市場の見方

- 19年も半導体の高性能化が進展し、さまざまな半導体メーカーでテスト能力強化が継続されると考えています。
- しかし、米中貿易摩擦ははまだ解決に至らず、多くの製品のサプライチェーンで在庫調整が継続されています。当面は、テスト需要への逆風が続くという見方をしています。
- 顧客別に濃淡はありますが、全体としては10月以降のテスト受注回復を、現在想定しています。
- 暦年19年のSoCテスト市場予想は、3か月前の推定と同額の約\$2.0Bです。
- メモリ・テスト市場は前回の予想を引き下げます。足元の非常に悪い感触から、550Mから650Mの間で推定しています。
- また18年の市場規模を精査し、SoC、メモリともテスト市場の規模を上方修正しました。そのため、19年のテスト市場予想は前回の決算発表時より対前年減少率が大きくなりました。SoCは20%、メモリは40~50%の対前年比減を予想しています。
- それだけ18年は、当社に対しても競合企業に対しても、テスト需要が高水準だったということになります。19年はその反動がやってくるだろうという予想です。
- では18年がピークだったかということ、そうはならないだろうと考えています。
- 半導体の高性能化に即したテスト強化、信頼性保証の強化トレンドは今後も続きます。5GやAIなどの拡がりに沿って、20年のテスト市場は19年を上回ると予想しています。その後もこのトレンドに沿って、アップダウンを経つつ、テスト需要は拡大していくと考えています。

## FY19業績予想

	(億円)			
	FY18 実績	予想	FY19 前年度比	
			増減額	増減率
受注高	2,752	2,300	▲452	▲16.4%
売上高	2,825	2,300	▲525	▲18.6%
営業利益	647	300	▲347	▲53.6%
営業利益率	22.9%	13.0%	▲9.9pts	
税引前利益	662	310	▲352	▲53.2%
当期利益	570	260	▲310	▲54.4%
当期利益率	20.2%	11.3%	▲8.9pts	
受注残	749	749	-	-
為替レート*	1米ドル	110円	110円	-
	1ユーロ	129円	130円	1円 円安
ROE	35.3%	12.6%	▲22.7pts	

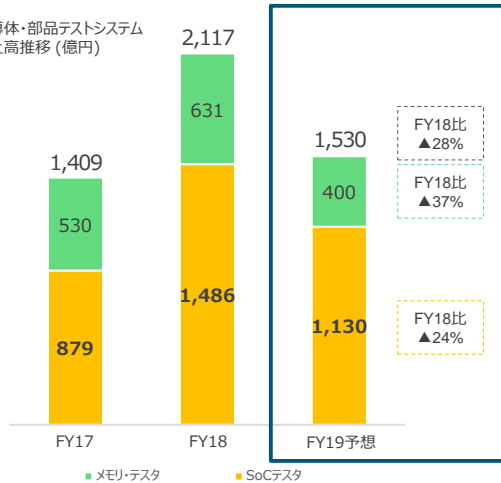
\*為替レート変動が当社のFY19営業利益に与える影響の最新見直しは、対米ドルが1円安時プラス5億円です。対ユーロはマイナス1億円です。

### ○ 2019年度の業績予想

- 市場減速の影響を受け、FY19の当社業績はFY18に比べ落ちる見通しです。
- 受注・売上とも通期2,300億円の予想です。受注は、上期が底になり、下期に回復していく方向感です。売上は、受注残もあり、上期も受注よりは落ち込まず、上期の方が売上が大きくなると現在予想しています。
- また逆風の中でも、今回の予想はFY17を上回るものです。高性能な半導体の開発が、当社の業績を下支えします。
- また半導体市場は、5Gを契機として2020年以降また大きな成長サイクルに入っていくと考えています。
- テスト市場も今年は減速しますが、20年に回復し、その後も5GやAI、IoTなどに牽引される形で持続的・中長期的な拡大が見込まれます。
- 昨年発表した当社の中期経営計画は、3カ年平均で目標設定をしています。単年度の環境変化や業績変動に左右されず、中長期的な観点から事業拡大に取り組むためです。
- 当社のFY18の売上は2000年度以来の18年振りの記録となりましたが、2000年度と昨年度では、当社の事業構造は大きく変わっています。当時はメモリテスト事業に頼っていましたが、今はSoCテストに軸足を置く形に構造を変えています。
- SoCビジネスはメモリに比し、顧客数も多く、品種も多様で、ファブレス・ファウンドリ・OSATとサプライチェーンも複雑です。市場が大きくより安定したビジネスである一方で、メモリビジネスに比べきめ細かい顧客サポートが必須な、手間もコストも掛かるビジネスです。
- FY19予想は売上減少率に比し利益の減少率が高くなりますが、20年以降のシェア維持・拡大のための先行投資として、R&D、SE、営業サポートなどの大幅な人員増強を計画していたり、AIやIoTの活用など将来のテストビジネスのあり方を産学連携してリサーチする費用を織り込んでいるためです。

## FY19見通し（事業別）

半導体・部品テストシステム  
売上高推移（億円）



### 半導体・部品テストシステム事業

#### <SoCテスト>

- 好調だったFY18比では減収予想となるが、半導体高性能化の進展がSoCテスト需要水準を下支え
- アプリケーション・プロセッサやイメージセンサなど、スマートフォン端末高性能化を支える半導体へのテスト能力増強トレンドが持続
- EUV本格立ち上げも、ハイエンド・プロセッサ向けテスト需要をサポート
- 5G関連の需要本格化はCY20以降を想定

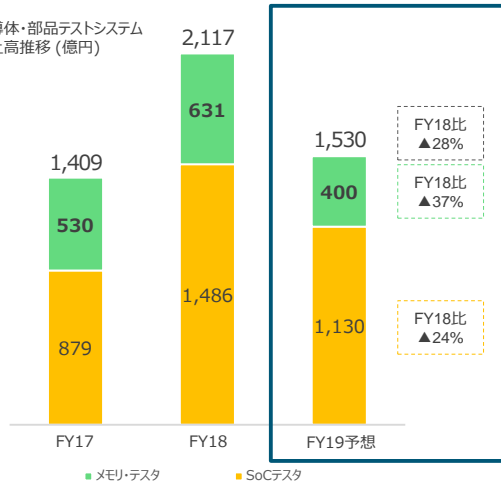
### ○ SoCテスト事業の今期見通し

- ・在庫調整の影響もありFY18ほどではありませんが、FY19も半導体高性能化の進展がSoCテスト需要の水準を下支えすると考えています。
- ・売上の軸となるのは、アプリケーション・プロセッサやイメージセンサなど、スマートフォン端末高性能化を支える半導体向けのテストです。
- ・スマートフォン市場の減速が懸念されていますが、テスト需要とスマートフォンの台数成長率は必ずしも比例しません。FY18業績の通り、スマートフォンに内蔵される半導体の複雑化がテスト項目の増大を生み、それがテスト需要につながります。
- ・EUVが本格立ち上げされることも、ハイエンド・プロセッサ向けテスト需要をサポートします。
- ・ディスプレイ・ドライバIC向けも、FY18ほどではありませんが、需要はまだ続きます。
- ・5G関連のテストビジネスはすでに始まっています。需要本格化はCY20以降を想定しています。こちらは後ほど触れます。



## FY19見通し（事業別）

半導体・部品テストシステム  
売上高推移（億円）



### 半導体・部品テストシステム事業

#### <メモリ・テスト>

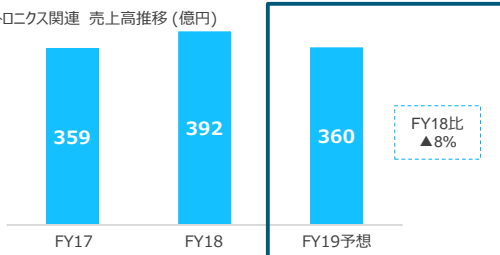
- メモリ在庫調整の影響下、メモリ・テスト需要は足元低調
- テスト需要回復時期はビット需要の回復ペースに依存するが、現状では下期の回復を見込む
- とくにDRAMで、微細化、DDR5シフト、HPC向け高速品の需要立ち上がりなど、テストにポジティブなトレンドを見込む
- NVMは、NAND多層化投資に関連した需要が中心となる見通し

#### ○ メモリ・テスト事業の今期見通し

- メモリ在庫調整の影響下、メモリ・テスト需要は足元低調ですが、現状では下期の回復を見込んでいます。
- DRAMでは、微細化、DDR5へのシフト、HPC向け高速品の需要増などに関連した商談が期待できます。
- NVMは、NANDの多層化投資に絡む需要が主体となる見通しです。中国NANDメーカーも立ち上がり、ある程度の受注をいただいています。

## FY19見通し（事業別）

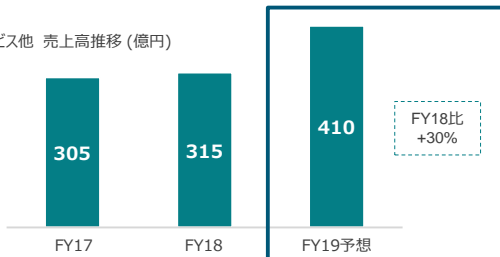
メカトロニクス関連 売上高推移（億円）



### メカトロニクス関連事業

- メモリ顧客のテスト投資減速に伴い、DI製品は減収予想
- EUV関連需要の取り込みによりナノテク製品は増収見通し

サービス他 売上高推移（億円）



### サービス他事業

- 顧客内のテスト稼働は一定維持されており、中核事業であるフィールド・サービス売上の底堅い推移を見込む
- Astronics社のSLT事業の買収効果などにより、セグメント増収を予想

### ○ メカトロニクス関連、サービス他事業の今期見通し

- メモリ顧客のテスト投資減速に伴い、DI製品は減収予想です。
- ただEUVの立ち上げによってナノテク製品は増収見通しとなっており、メカトロニクス関連事業は、前年度比やや減という売上予想です。
- サービス他事業については、フィールド・サービスで底堅い売上を見込んでいること、2月に買収したAstronics社のシステムレベル・テスト事業をこの部門に組み入れた効果で、増収を予想しています。

# 当社の中長期経営方針

## 「グランドデザイン」(長期経営方針・FY18-27)

### <長期経営目標>

「売上高3,000億円～4,000億円の達成」

- 成長分野へのフォーカス、顧客とのパートナーシップ強化でシェアを年1%ペースで改善 (CY17実績:36%→CY27目標:46%)
- 新規事業として、現在のコアビジネスの周辺分野の開拓

### <コスト、利益構造>

- 売上成長を目指すにあたり、コスト構造のバランスにも配慮

	3,000億円レベルでの コスト構造モデル
売上高	3,000億円
売上原価率	46%
売上高販管費比率	32%
(うちR&D費比率)	13%
営業利益率	22%

## 中期経営計画(FY18-20)

- 製品需要の年ごとのアップダウンは避けられないため、3カ年平均で数値目標を設定
- 新たなテスト需要に卓越したソリューションを提供し、売上高と市場シェアを伸長
- 中長期の売上成長に向け、積極的なR&D投資・M&A
- 半期連結配当性向30%を基本としつつ、成長投資見通しを勘案した上で総株主還元を機動的に検討

	中期経営計画 (FY18-20 平均)	
	保守的シナリオ	ベースシナリオ
半導体試験装置市場 成長率	年0%	年4%
売上高	2,300億円	2,500億円
営業利益率	15%	17%
ROE	15%	18%
1株当たり当期利益(EPS)	135円	170円

## ○ 当社の経営方針

- 次に、中長期の観点で当社がどのような方向に向かっていこうとしているのかを、お話します。
- 昨年4月、当社は中長期的にどうありたいか、何をなすべきかを定めた、FY18を起点とする10年間の長期経営方針と、3年間の中期経営計画を策定し、全社一丸となり取り組んでいます。
- FY19はこの中期経営計画の2年目にあたります。

## 中長期成長に向けた取り組み

### FY18に実施した重要施策

- 5Gへの注力と顧客獲得
- 中長期を見据えた戦略実行のための社内組織変更
  - テスタ開発部門のグローバル統合
  - AIやデータアナリティクスの活用をはじめとした、新たなテストビジネスの探索チームを組成
- 近縁事業領域への拡大への一歩として、米Astronics社のシステムレベル・テスト事業部門を買収
- 事業マネジメント体制強化のため、ROICベースの事業管理・評価ツールを導入

システムレベル・テスト・システム  
ATS5034



### FY19重点施策

- 業界をリードする最重要顧客とのエンゲージメント強化
- 市場シェアの維持・拡大
- 中長期的成長の観点での人員増強、人材開発強化
  - R&D人員、重点地域におけるマーケティング/セールス/SE/サービス要員を増強
- オペレーショナル・エクセレンスに向けた業務効率化
- ROICを活用した事業運営の高度化

<開発投資・設備投資の見通し>

	FY18実績	FY19予定
研究開発費	379億円	370億円
設備投資	66億円	100億円
減価償却費	50億円	60億円

### ○ 中長期成長に向けた重点施策

- 中計初年度のFY18は、ここに掲げたような、中長期の成長に向けた取り組みを行いました。
- その結果、5G向けアプリケーション・プロセッサ/5Gモデムのビジネスについては、大手各社から受注をいただきました。そして次の展開に向け、非常に大きな協力を求められています。5Gはお客様にとっても技術的に簡単なものではなく、開発を協働しています。
- テスタビジネスの成長を確かにするため、今年も、業界をリードする最重要顧客とのエンゲージメント強化と市場シェアの維持・拡大を最優先に取り組んでいきます。
- 並行して成長基盤の確立も行います。さきほど申し上げた中長期的成長の観点での人員増強のほか、人材開発強化、いっそうの業務効率化、ROICを活用した事業運営の高度化を推進します。
- 人員については、FY17末比、今まで200名増強しました。さらに200名ほどの増員を計画しています。
- FY18の売上増加局面でも、工場や生産設備の投資は極小に留まりました。FY19も生産キャパアップの大型投資は予定していませんが、生産・開発効率アップのための工場改修やITシステムへの投資を予定しています。これらにより、FY19の設備投資は、昨年度よりも大きな100億円を予定しています。
- 我々のビジネス上一番大事なのは、人と技術への投資となります。

## 市場シェアの状況



<SoCテスト> CY18市場シェア 52% (前年比 +22pts)

<メモリ・テスト> CY18市場シェア 58% (前年比 +1pt)

### ○ 当社の市場シェアの状況

- 当社のグランドデザインや中期経営計画では、市場シェアを毎年1%ずつ引き上げることを目標に掲げました。
- 結果から言うと、CY18は大幅なシェア伸長を果たすことができました。
- 原動力はSoCテストです。CY17にSoCテスト市場の当社シェアは3割程度でしたが、CY18はおよそ5割に到達しました。
- メモリ・テスト市場は、全デバイス・工程で顧客の投資が伸びる中、多方面で競争がありましたが、5割超というこれまでの高いシェアを維持できました。
- CY19も、CY18に伸ばしたシェアを維持・拡大させていきたいと考えています。
- そしてCY20は、5Gの拡大と連動して通信用半導体のテスト需要が拡大する年になると考えています。またこれに同期して、プロセッサやメモリのテスト需要も伸びる年になる可能性が高いと期待しています。これら分野の半導体テスト需要が伸びるということは、当社がさらにシェアを伸ばす大きなチャンスが到来するということになります。

## 5Gは中長期にわたってテスト需要を牽引



- 5Gは通信技術にとどまらず、情報化社会のあり方を再定義する可能性のある技術基盤
- 広範な領域でデジタル革命の進展を促し、中長期かつ持続的に半導体需要・テスト需要を押し上げる存在となると予想

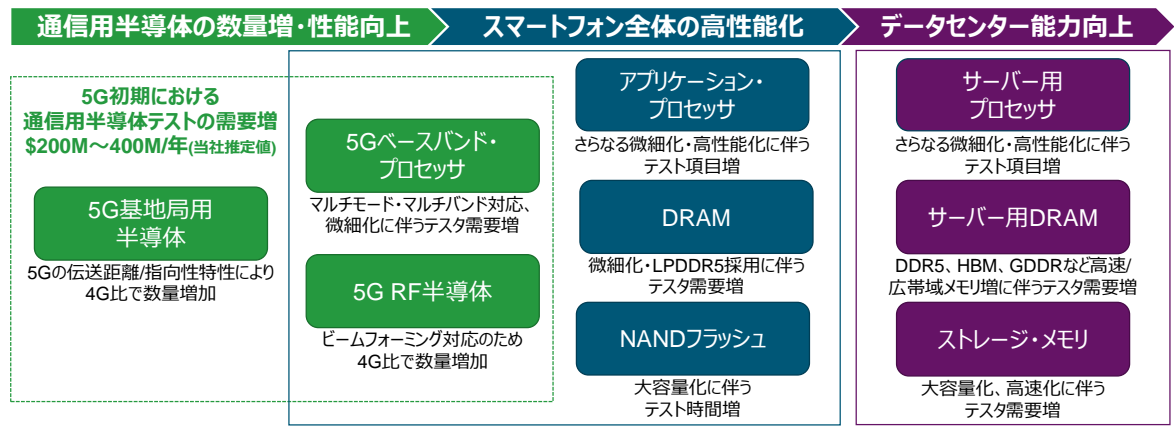
22 | ADVANTEST

All Rights Reserved - ADVANTEST CORPORATION

### ○ 5Gがもたらす事業機会

- ここで、5Gがもたらす事業機会について少し整理します。
- 5Gは、単なる通信技術の変化にとどまらず、情報化社会のあり方を再定義する可能性のある技術基盤になりうる、とされています。
- 高速・低遅延・大容量という特長を持つ5Gは、ADAS/自律走行、IoT/スマートデバイス、AIといったキーワードで象徴されるデジタル革命の進展を間違いなく促すことになると思います。
- それによって、今後10年にわたって、半導体需要を持続的に押し上げていく可能性があると思います。このことが当然テスト市場にも波及していきます。

# 初期の5Gとテスト需要



**5Gは半導体の高性能化と低消費電力化=テスト難易度上昇・テスト複雑化を加速**  
**テスト課題の顕在化とともに、当社に対するソリューション依頼が増加中**

## ○ ここ数年の5Gとテスト需要

- ここ数年に具体化していくと思われる、5Gとテスト需要について整理したのがこの図です。
- 5Gの登場と直接関わりがあるのは通信用半導体のテストの領域です。4Gから5Gになると、伝送速度が速くなる一方で、伝送距離が短くなり、指向性は強くなります。また、多チャンネル化します。このことは、通信用半導体の生産数量の増加をもたらします。
- それに伴うテスト市場への直接的な影響として、5G移行により、年間で\$200~400Mの市場押し上げ効果があると当社では推定しています。
- ただ5G移行によるテスト市場への影響はそれに留まりません。
- 5Gによってより大量にやり取りされるデータを処理するために、スマートフォンやデータセンターの高性能化が必要になります。
- そのために各プロセッサやDRAMの微細化に拍車がかかります。またDRAMや不揮発性メモリについては高速化と大容量化が必須です。
- こうした今後のテスト課題に対し、顧客各社から当社に対するソリューション依頼が既に増加しています。
- 5G黎明期の今この時期から、人員増強投資が必要になった、ということが、先ほど申し上げた先行投資ということになります。
- 顧客サポート力が、この先10年のテスト市場シェアの優劣を決定する重要なポイントとなると考えています。

## 中期経営計画の初年度進捗

	FY15-17 平均	中期経営計画 (FY18-FY20 平均)		FY18実績
		保守的シナリオ	ベース・シナリオ	
売上高	1,751億円	2,300億円	<b>2,500億円</b>	<b>2,825億円</b>
営業利益率	9%	15%	<b>17%</b>	<b>22.9%</b>
ROE	12%	15%	<b>18%</b>	<b>35.3%</b>
1株当たり当期利益(EPS)	74円	135円	<b>170円</b>	<b>302円</b>

- 中期経営計画（FY18-20）初年度となるFY18は、テスト市場拡大と市場シェア改善により、ベース・シナリオで掲げた全てのKPIで目標値を超過。3か年計画の達成に向け、力強く進捗できた
- 半導体の高性能化やテストの重要度増進など、当社の中長期的成長を支える市場トレンドに変化はない。世界経済の不透明感がテスト市場にも波及するなかFY19は減収減益を予想するが、FY20は業績回復を見込む
- 中期経営計画としては当初の目標値を据え置くとともに、引き続き目標値の達成に努める

### ○ 中期経営計画の初年度進捗

- 最後に、中期経営計画の初年度進捗でまとめます。
- 中期経営計画の初年度となるFY18は、テスト市場拡大と市場シェア改善により、ベース・シナリオで掲げた全てのKPIで、目標値を超過することができました。目標達成に向けて力強く進捗できた1年だったと思います。
- 一方で、FY19は減収減益予想で、現状ではすべてのKPIで中期経営計画の目標値を下回る見通しです。顧客の設備投資予算は安定的に増加するものではありません。想定以上の増加があれば必ず反動減があります。中期経営計画の目標値を3年平均で設定した理由はここにあります。
- ただ半導体の高性能化やテストの重要度増進が当社の中長期的成長を支えるという、中長期経営方針で見通した市場トレンドに変化はありません。FY20の業績回復を見込んでいます。
- 中期経営計画の目標値を現状値のまま据え置き、引き続き目標値の達成に努めていきたいと思っています。